

講義の終わりがわかるのはなぜですか

Q

この4月から大学に入りました。高校と違って、チャイムの前に講義が終わることがよくあるのですが、そろそろ終わりそうなタイミングで、学生が一斉に退室準備を始めます。私もなんとなくタイミングが察知できるのですが、どうしてかわかりません。

A

札幌学院大学人文学部教授

森 直久 (もり なおひさ)

学生時代、私にも似た経験があります。講義する側に立った今でも、学生たちがほぼちょうどどのタイミングで片付けを始めるのを何度も目にしています（ということは、定刻前に終わっているということだな……）。

52号でも引用したシェグロフとサックス（1995）の研究は、会話がどのように終わるのかを明らかにしようとするものでした。彼らは電話での会話を研究対象にしたのですが、電話に限らず会話全般に彼らの成果は適用できると思います。講義はしばしば、先生から学生への一方通行的な発言に終始しますが、聞き手が存在する以上、基本的に会話とみなすことができ、シェグロフらが言うような形で終わると考えられます。

会話の最後には別れの挨拶がきます。シェグロフらはこれを「最終交換」と名づけました。「じゃあね」とか「バイバイ」とか。講義でいえば「これで終わりです」とか「また来週」になるでしょうか。最終交換の直前には「発言権の放棄」がきます。これは互いが、あまり内容のない言葉を相手とやり取りすることで、これ以上話すことはないことを暗に示す発言です。「うん」—「うん」とか「ええ」—「はい」とか。講義では、先生が投げかけた発言に学生が無言であることで、先生は学生が発言権を放棄したとみなすでしょう。「いいですか」—「(無言)」—「はい」—「(無言)」のように、「発言権の放棄」に至るには、それまで話していた話題を終了させないといけません。シェグロフらは、その方策が四つあると述べています。すなわち「話題退化」「話題打ち切り」「話題限定」そして「別活動への従事表明」です。これらを駆使して、

先生は講義を締めくくっていると考えられます。

話題退化は、それまで語られていたトピックに関連させつつ、少し違った視点からコメントする方策です。「今日話したことを、日常に役立ててみるのもいいと思います」などでしょうか。話題打ち切りは、内容の確認をとる形で話題の完了を示す発言です。「今日の話はわかったかな」のようになります。話題限定とは、トピックを短い文で（時に、格言的に）まとめる発言です。生涯発達心理学の発達課題を解説していた先生が、「人間はいくつになっても、越えるべき山があるということですよ」というような発言をすとか。最後の別活動への従事表明は、講義以外に従事すべきことができたことと表明する方法で、「そろそろお昼を食べに行かないといけませんね」というように、話題のまとめと言うより、これ以上話をしていくことができない旨を伝える発言です。

会話が終了へと至る構造は、シェグロフらによって明らかにされましたが、これは気づかないままに私たちが日常やっていることです。だからこそ、先生がその日の講義のトピックを終了させようとしていることが学生にはわかり、片付けの準備が始まるのだと思います。

文 献

- E. シェグロフ, H. サックス (1995) 「会話はどのように終了されるのか」 G. サーサス他/北澤裕・西阪仰 (訳) 『日常性の解剖学：知と会話』 マルジュ社



Profile — 森 直久

札幌学院大学人文学部教授。専門は認知心理学、社会心理学。主な著書は、『心理学者、裁判と出会う：供述心理学のフィールド』（共著、北大路書房）など。